

# アウグスティヌスのマニ教理解について

## —『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』—

山田 庄太郎

### 1 目的

本稿の目的は、396年に書かれたアウグスティヌスの著作『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』*Contra epistolam Manichaei quam vocant Fundamenti*を基にして、アウグスティヌス研究の観点から、アウグスティヌスが接触した限りでのマニ教がいかなるものであり、また彼がそれに対しどのように対処しようと考えていたかを明らかにすることにある。

400年頃に書かれた『告白』において、アウグスティヌスは373年から386年の青年期の13年間を、マニ教徒として過ごしたと証言している<sup>1</sup>。また同書で語られるいわゆる『ホルテンシウス』体験による真理の探究の道への熱意が、まずマニ教へと結び付けられているのは諸家の指摘する通りである<sup>2</sup>。加えて岡野は、キリスト教への回心から『告白』執筆までの期間の著作に、非常に多くマニ教に対する駁論が含まれていることを指摘しており、アウグスティヌスがマニ教に対し強い問題意識を抱えていたことを示唆している<sup>3</sup>。

こうした強い問題意識は、ただ自らの過去の誤ちに対する自己批判のみに関わるものではない。たとえば無からの創造という説は、ジルソンも指摘しているように、マニ教の創世神話との対決の中から現れてきたものである<sup>4</sup>。アウグスティヌスの思想の形成過程を考える時、マニ教との対峙が一定の範囲で何らかの影響を与えていたのは確かであろう。それ故、マニ教とは何であり、アウグスティヌスがそれに対しいかなる態度を以って接したのかを明らかにすることは、必ずや彼の思想を解明する為の一助となることだろう。

考察の為のテキストはデクレ版(BA)を用い、邦訳は教文館版アウグスティヌス著作集を参照した。邦訳に関しては適宜改変を加えてある。

### 2 マニ教研究の困難と本稿におけるアプローチ

しかし、マニ教とは一体何であったのか、という問いに答えるのは非常に困難なことである。近年の宗教学の研究成果は、マニ教それ自体についてのかかなり豊富な情報を我々に提供してくれる。しかしそれと共に、マニ教自体の歴史的、地理的な広がり多様性が明らかにされてきた。

20世紀以降のマニ教自体の研究史は、大きく2つの段階に区切ることが可能である<sup>5</sup>。

敦煌文書の発見以後、マニ教本来の文書が発見されたことにより、20世紀になるとマニ教の研究は大きく進んだ。イラン語や漢訳資料を主たる資料とし、R.ライツェンシュタインは『イランの救済神話』(ボン, 1921)において、マニ教をグノーシス主義のイランの形態の典型として位置づけた。他にマニ教の起源をイランの神秘宗教の内に求める研究もあり、1960年代まで基本的にマニ教はイラン・ゾロアスター的起源を有した宗教として捉えられていたと言える。

それに対し、1970年代に入るとマニ教の研究は新たな展開を見せる。エジプトのオクシュリユンコススの洞穴より発掘され、既にケルン大学のパピルス文書コレクションに収録されていた羊皮紙の写本(ケルンのマニ写本)が再発見される。5世紀頃にシリア語の原本よりギリシア語に訳されたと考えられているこの写本には、マニが幼少期にユダヤ・キリスト教的要素の強いグノーシス主義的洗礼教団であるアルカサイ派の下で暮らしたことが記されており、ここから教祖マニ自身の思想的な背景に既に、イラン・ゾロアスター的要素のみならず、ユダヤ・キリスト教的要素が存在することが強く主張されることになった。

このような研究史上の展開は、新たな資料の発見に促されて生じたものである。ところで、マニ教に関する文字資料は非常に多くの言語によって残されており<sup>6</sup>、これは、マニ教がいかに広範な地域に広がっていたかを示している。

創始者であるマニの存命中にマニ教は計3回、大規模な伝道・布教を行っている。この創始者の熱意に触発される形で、マニ教は西はイタリア・スペインから東はウイグル国境を基に<sup>7</sup>中国に至るまで広く伝播する<sup>8</sup>。この地域的な広がりには、マニ教に非常に多様な外見を与えることになる。マニ自身の重要な発明である一つ概念装置、即ちキリスト教、ゾロアスター教、仏教という当時の三大宗教の預言者達を一つのリストに組み入れ、その最後に最後にマニを位置付けるという「預言者の印璽」の概念<sup>9</sup>が、創設以来、マニ教に折衷主義的な特色を与えていた<sup>10</sup>。それ故、マニ教は布教した先の各地で、土俗的なあるいは当地で流行している宗教の姿を借りることが出来たのである。たとえば唐代中国において732年、マニ教禁制の勅が出されたが、その勅からはマニ教が仏教の一派を装って布教していたことが窺える<sup>11</sup>。残された資料から明らかなように、マニ教は早くから各地の言語で伝えられ、それ故、用語の不統一や、教義上の細かな差異も存在した。

しかし、それら多様な形姿をとったマニ教に、マニ教としての統一性を与えたのが、預言者マニの見たヴィジョンとしての世界の創世以前から続く神話であった。中国語で記された『摩尼教残経』の一節は、一部仏教用語を転用しながらも、その本来の姿をしっかり残している<sup>12</sup>。

神話という点では一貫性を有していたマニ教であるが、その布教の形式や用語は、現地に適応したものを採用した。資料の少なさと相俟って、この折衷主義がマニ教の本質を捉えることを困難にしている。ことに我々がこれから問題としようとするアウグスティヌスの時代の北アフリカのマニ教徒達について、事実を正確に突き止めることは難しい。ラテン語ギリシア語で現存する資料のほとんどはマニ教と敵対関係にあったキリスト教の関係者によるものであり、しばしば事実とは反するエピソードが挿入されている。たとえば、ギリシア人はマニについて語る際、マニを「狂人」扱いするのが常であった。

マニのギリシア語名マネスとマニア（狂気）の語が似ていた為である。しかしこれは根拠のない批判であって、マニの名は本来「生命の器」を意味した<sup>13</sup>。マニ教自体の地理的、時代的広がりに加え、こうした記述者の思想的背景もまた問題となるのである。

マニ教には既に創設された初期の頃からキリスト教の影響を受けていたが、マニ自身が、あるいは初期のマニ教集団が、キリスト教を自派との関係からどのように位置づけたかは不明である。さらに時代と共に教義が洗練され、土地に応じて彼らが自己の体系内に取り込んだ要素の数も増加していったものと思われる。それに伴ってまた、彼らマニ教徒自身の自己理解にも変化が生じたことだろう。それ故、須永はマニ教を(a)マニ自身によって説かれた教え(b)マニの直弟子達によって説かれた教え(c)マニ教徒によって語られた教え(d)異教徒によって伝えられた教え、以上の四つの観点から捉え、理解すべきであると主張する<sup>14</sup>。

アウグスティヌス研究にとって重要であるのは、(c)と(d)との間の差異を明確にすることであろう。両者の間の相違を明確化することによって、アウグスティヌスのマニ教観が初めて明らかになるからである。

本節の最後に、「基本書」について一言触れておきたい。「基本書」に関して我々に与えられている情報は非常に限定されている。基本的な情報は全てアウグスティヌスの報告によらねばならない上に、この書がマニの手によるものなのか、そもそも一体いつ頃に書かれたのかについても不明である。確かにマニ教の正典の中には、マニの書簡集が含まれていたが<sup>15</sup>、しかしこの「マニの書簡」が、マニ教の正典の中に含まれるマニの書簡集に属する一書であるのかは不明である。但し「基本書」が当時の北アフリカのマニ教徒の間で用いられ、十分な権威を備えていたことは確かであろう。

### 3 マニの位置づけ

マニ教の創始者であるマニは、216年4月に現在のペルシアで生まれた<sup>16</sup>。

マニの思想的背景に関しては、イラン・ゾロアスター的伝統を継承したとする説と、ユダヤ・キリスト教的なグノーシス主義の伝統に連なるとする説、ならびに重層的な信仰がその基礎にあるとする説がそれぞれ提唱されており、未だ一致をみていない<sup>17</sup>。しかしマニ自身が、当時その版図を着々と広げていたキリスト教について認識していたことは少なくとも確かであり、さらにキリスト教の諸要素を既に積極的に取り入れようとしていたことが知られている。

アウグスティヌスの対マニ教論駁書の一つであり、392年にマニ教徒フォルトゥナトゥスとの間で行われた公開討論の記録である『フォルトゥナトゥス駁論』からは、マニ教徒がパウロ文書を重視し、自らの教義体系の中に組み込んでいたことが窺える<sup>18</sup>。それに対し、アウグスティヌスとは別の、西方のマニ教を知る為の資料であり、4世紀前半に聖職者であるヘゲモニウスの手によって書かれた『アクタ・アルケライ』と、それを基にしたアクタ・アルケライ系の資料は、異なったマニ像を提示している。それによれば、マニの思想的背景にあるのは東方の宗教、たとえばエジプトの伝統や仏教であって、自らを助け主 *paracletus* とするようなキリスト教的色彩は、結局の所布教を目的として後にマニによって付加されたものに過ぎない。但し、このアクタ・アルケライ系の

資料の背景には、マニ教徒達がキリスト教の一派を装い教勢を拡大することを恐れ、マニをキリスト教とは異なる思想的伝統の上に位置づけ、非キリスト教として退けることを目的にした護教的意図が存在したことが指摘されている<sup>19</sup>。従ってアクタ・アルケライ系の資料の主張をそのまま受け取ることが出来ない。注目すべきは、同資料群がマニ教の拡大に対するキリスト教側の初期の反応を示しており、なおかつ西方でのキリスト教とマニ教との論争に寄与してきたという事実であろう。『アクタ・アルケライ』はギリシア語からラテン語に翻訳されておりラテン語圏にも影響を与えた。従ってアウグスティヌスに先立つ時代の対マニ教論争の一つの主要な論調を、マニをキリスト教思想の外側に位置づけようと試みることであったと我々は推察するものである。

それに対しアウグスティヌスの場合はどうであろうか。

『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』の v-x 章は、マニ教の創始者であるマニとは何者かを明らかにすることに充てられている。アウグスティヌスによれば「基本書」は次の言葉から始まる。「父なる神の摂理によってイエス・キリストの使徒であるマニ。これらは永遠なる生ける泉から出た救いの言葉である<sup>20</sup>」。ここでマニはイエス・キリストの「使徒」apostolus として描かれている。この「基本書」におけるマニの位置づけに対し、マニ教徒達は「福音書を読みあげて」それを確認しようとする、とアウグスティヌスは報告している<sup>21</sup>。書簡の本来の意図は置くとして、彼が接した限りでのマニ教の特徴は、福音書を自派の教説の核心として用いた点にあると言えよう。

しかし肝心の福音書には使徒達の名の中にマニの名が含まれていない。それ故、マニ教徒は使徒の語を使徒達に「遣わされたもの」apostolus である「助け主」paracletus として解釈する<sup>22</sup>。このマニ教徒の主張からアウグスティヌスは、「基本書」の意図がマニを助け主である「聖霊」Spiritus sanctus として位置づけることにあると考えるのである<sup>23</sup>。

ここから彼の反論が開始される。とりわけ注目すべきは、彼が『使徒行伝』の権威をもってマニ教徒達からの想定される反論を捌いている点であろう。マニが使徒でないのは、福音書にその名が見当たらないだけでなく『使徒行伝』に空位となった 12 人目の使徒の座を誰が占めたかが記されており、マニの入り込む余地が存在しないからである。ところでこの『使徒行伝』は福音書を奉じるカトリックの権威が共に勧めるものであり、さらに同書では、マニ教徒が尊重する「パウロの召命と使徒職についての非常に有名な物語が」記されている<sup>24</sup>。とすればマニ教徒も共に『使徒行伝』の権威性を認めるべきであるというのが彼の主張である。

想定されるマニ教徒の主張に対するアウグスティヌスの想定反論は、『使徒行伝』を用いて、マニが自身を聖霊と同一視されるように望んでいたとの帰結を導くことから理解されるように、あくまでマニの、あるいはマニ教徒の主張をキリスト教の枠内から捉えようとする意図の下に為されている。アクタ・アルケライが目指したマニを非キリスト教的伝統の下に位置づけようとする意図は、アウグスティヌスには引き継がれていない。マニはカトリックが権威によって教えるものを、確実なものとして提示すると約束したのであるが、しかし彼が到達したと認識したのは全くの虚妄であるというのがアウグスティヌスの主張である。ここで彼はあくまでマニ教の問題をキリスト教の枠内で論じようとしているのである。

#### 4 マニ教の教説とその問題点——アウグスティヌスに則して

イエスが聖霊を遣わすことを約束したのであるから、マニが聖霊であると主張する時、マニはイエスによって遣わされたものとなる<sup>25</sup>。ここからイエスもマニも等しく讃えられるべきであるということが帰結するはずであるが、マニの教説はその点においてもまた矛盾があるとアウグスティヌスは言う。なぜならマニはイエスに代わって自らこそが崇拜されるべきであると望んだからである。それ故、彼は、自らがマニ教徒であった時代にしばしば、「あなた達のペーマ、即ちマニの殺された日には、五段の祭壇を建て高価な布で飾り、崇拜者達に向かってよく見えるように置き、非常な栄誉を与えているにもかかわらず、主の復活祭には...全く祝祭らしい仕度をしない理由は何か」という疑問を口にしたと記している<sup>26</sup>。もし福音書によってマニの地位を確保するのであれば、イエスの復活も敬うべきであるが、彼らはただマニのみを崇めた。マニ教徒にとって、キリストの復活の「代わりに」マニの受難の日であるペーマを祝うことは、マニ教徒としての誇りであったからである<sup>27</sup>。ここに彼らの主張の論理的な矛盾がある。

こうした論理的な矛盾はマニの位置づけについてだけではない。

『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』の xi 章以下 xli 章迄は「基本書」の中でマニが明らかにすると約束し、提示した内容の吟味に充てられている。アウグスティヌスはまず、アダムとエヴァの出生の秘密について知ることが、墮落や死から解放をもたらすというマニの言葉を引用する。彼ら最初の間人は、「言葉によって産み出されたのか、それとも物体から初めて生まれたのか」。この問題の真理を明らかにすることこそ、「基本書」の主題である<sup>28</sup>。さらにマニはこの秘密を知る為、「世界が据えられる以前 ante constitutionem mundi に起きたことをまず知り、そしてその時いかにして戦いが行われたか」を知るように求める。なぜならそれらを知ることによって、我々は光の本性と闇の本性を区別することが出来るようになるからである<sup>29</sup>。

我々はここで、アウグスティヌスに従って世界が据えられる以前の事柄についてのマニの説明について概観しておくことにしよう。

「基本書」におけるマニの主張は次の通りである。「始まりにおいて」 in exordio 「2つの実体」 *duae substantiae* が互いに分かたれた。「父なる神」は「光の帝国」を保持し、この帝国はその内にそれぞれ無数の巨大な宝が隠されている 12 の「種族」 *membra* を有している。この光り輝く王国は光と至福の地の上に建てられている<sup>30</sup>。それに対しこの光り輝く聖なる地の一部分に接して、「燃える物体」 *ignea copora* であるところの「有害な種族」 *genera pestifera* が住んでいる「闇の地」が存在する。ここにはまず「無限の闇」が、向こうには「汚く濁った水」が、さらにその内側には「恐ろしく激しい風」が、その内には「火と破壊の国」が、さらに内側には「霧と煙に満ちた種族」が存在する。これら 5 つが有害な地の 5 つの本性であり、最も内側にある「霧と煙に満ちた種族」の君主こそ他の全てを従える頭であり、全ての闇の種族の精神であり起源であった<sup>31</sup>。光の地と闇の地はそれぞれ、前者は善の、後者は悪の起源として理解される。

恐らくこの後には光と闇の 2 つの実体の争いが、この二つの国の記述に続くのであろうが、これ以降のマニの主張についてアウグスティヌスは記していない。マニはこの天地創造以前の争いの物語を重視し、何が「その時」に生じたのかを説いた<sup>32</sup>。ここでア

ウグスティヌスは、この天地創造以前の争いの物語の、とりわけ光の種族と闇の種族という2つの種族に関する教説に問題の核心を見ていると言える。

アウグスティヌスはこれら天地創造以前の2つの国の存在を認めようとしなない。なぜなら、その時には未だ天地が存在しなかったからである。今ここに存在する世界の他に、それ以前に存在する別の世界があるなどとは彼にとって想定しえぬものであった。しかし彼はひとまず彼らマニ教徒の主張を聞き入れた上で、もしそのような仮定が成立するとどのような矛盾が生じるかを説明している。

ここで彼の議論の主要な一部を取り上げて見ることにしよう。なお本書のアウグスティヌスの議論の大部分がこの天地創造以前の物語に対する反駁に向けられていることに注意を促しておきたい<sup>33</sup>。

アウグスティヌスの反論は次の通りである。闇の地に住む有害な種族は燃える物体であるのだから、それらが住む闇の地もまた物質的なものである。然るにこの闇の地は光の地と辺を接している<sup>34</sup>。そして辺が存在する限り、辺の存在しない所は無限に広がっているととしても、限界づけられているということが帰結する。マニ教徒は光の地がいかなる境界によっても限定されないと主張したが、この主張は今や矛盾に陥る<sup>35</sup>。さらに、辺によって隣り合っているが故に、光の地もまた物質的なものでなければならぬ。非物質的なものが物質的なものに接触することはないからである<sup>36</sup>。従って物体性と悪とを結びつけるマニ教の基本的な態度はその根底から崩壊することになる。光の地もまた物質的なものであるとするならば、彼らが悪の起源であると主張する事物にもまた何らかの善性が認められなければならないのである<sup>37</sup>。

この他にも光と闇の地についての、またその住人に対しての考察が行われ、それらが最終的に字義通りに受け取ろうとすると矛盾に陥ることが示される。今やマニ教徒に残されているのは、マニの言葉を比喩的に解する道である。しかし比喩的な解釈は、マニ教徒達には許されていないとアウグスティヌスは言う。なぜなら、(彼が接した限りの)マニ教徒は「昔から神秘的な秘儀として書物の中で比喩的に語られてきたことは、最後にやって来た者が解き明かし、開示すべく保持されてきた」と主張するからである<sup>38</sup>。

この天地創造以前の物語はまた、現象の世界と切り離された「形而上的」な物語ではなく、自然科学に繋がる問題でもあった。矢吹によればマニ教の特徴として、マニ教が「自然と精神との両現象を峻別せず、自然界の過程をすべて精神的闘争の一部とみなした」ことが挙げられる。たとえば雨は、悪魔の汗であった<sup>39</sup>。恐らく、こうした自然現象の神話的な説明は、それなりに有効な合理的説明を個々の事象に対して提供したであろう。しかしまたそれらは、マニ教の神話体系を前提としているが故に、古代から蓄積された知の営み、たとえばプリニウスの『博物誌』といった当時の「科学」とは相容れない場合も多々あったと推察される。そして何よりも、無論例外的に偶然有効な対処となっていることもありえようが(たとえば適度な断食はある種の身体的病に対して有効でありえよう)、神話的な説明は、自然現象に対する有効な対処を我々に提供しえない。従って論理の上からだけでなく、経験の上からも、マニ教の教えは次第にマニ教徒時代のアウグスティヌスにとって不確かなものとなって現れてきたことと思われる。

## 5 誤りの原因——魂の働き

しかし何故マニはこのような誤りに陥ったのか。それを知る為には、魂が持つ認識の働きについて言及する必要がある。

アウグスティヌスは『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』の中で、魂の内に認識能力の三つの異なる段階を見ている。彼はまず「それによって真理を知解する能力」*potetia qua intelligit veritatem* と、それよりも下位の「それによって物体と結びつき、物体の内では知覚する能力」*potentia qua continet corpus et sentit in corpore* とを認める<sup>40</sup>。真理を認識する能力はまた、「身体感覚から引き出されて」描き出される様々な似像と対立することがある。たとえば真のカルタゴと思考によって描かれるカルタゴとが異なるように。その時、真理はこの誤った像に対し「激しく抵抗する」<sup>41</sup>。その結果、対立する像は誤ったものと判断され修正が加えられることになる<sup>42</sup>。思考や思考像が「身体感覚」に由来するものであるのに対し、この判断の基準としての真理は、非物体的であることをその本質とする<sup>43</sup>。

問題となるのはまさにこの判断の働きである。思考は恣意性を自らの特徴とし、それ故に真理を欠くのであればしばしば誤謬の原因となる。事実、無数の世界を考えたエピクロスは「思考」やこれまで論じてきたようなマニの「思考像」*pantasma*<sup>44</sup>は全てここから生じるのであり<sup>45</sup>、事実、マニの様々な誤った物語はこの世界の事象の観察から性急に結論を下した結果であるとアウグスティヌスは主張する<sup>46</sup>。たとえば二本足の人間は煙の種族に数えられるとマニ教徒は主張するが、人間の傲慢さと煙の上昇する性質とを考え合わせる時これは決して不合理な推論ではないとアウグスティヌスは言う。しかし人間が煙の中で煙から生まれたと主張する時、彼らは誤謬の内に陥っているのである<sup>47</sup>。

こうした思考の様式を、アウグスティヌスは「肉的な思考」*carnalis cogitatio* と呼ぶ<sup>48</sup>。肉的な魂 *carnalis animus* は非物体的で霊的な本性に十分に思いを致すことが出来ず、それ故判断の根拠としての非物体的な真理を欠いている。彼らは「自らの思考それ自体」を思考 *cogitatio* によって反省することが出来ないのである<sup>49</sup>。

アウグスティヌスは、マニやマニ教徒が誤謬に陥った原因を、非物体的なものを省みることなく、物的な事物を基に思考を組み立てる肉的な思考に求める。ジルソンの言葉を借りるならば、これは「物質主義的な思考」と換言出来るだろう。ジルソンはアウグスティヌスが接したマニ教の問題点をその物質主義にあると指摘した<sup>50</sup>。但しこの指摘は本来のマニ教の教説にはあてはまらない事を指摘しておかねばならない。なぜなら彼らの教説の中で、光の地は、それが悪の起源ではなく善の起源である限りにおいて非物的なものであらねばならないのだから<sup>51</sup>。

しかし、そうした本来のマニ教の教説は別として、今、マニ教徒達は自らの物質主義的な思考枠によって、光の地が物質であることを帰結せざるをえないような主張をしているというのが、アウグスティヌスの反駁の一つの主題である。マニ教徒達は、物質から出発し、ただ身体感覚によって受け取られるものから推論を組み立てる時、それら物体を越え出る可能性を自ら放棄しているのである。

## 6 マニ教徒の位置づけ——「矯正」の可能性

我々はどこでようやく、アウグスティヌスが想定する論争相手がいかなる者達であったかについて言及することが出来る。

まず注意すべきは、当時のマニ教が単に外面のみキリスト教的な装いをした宗教としてではなく、教えの上でもキリスト教の伝統を引き継ぐものと主張していたこと、そしてアウグスティヌスもまたあくまでマニ教をキリスト教の枠内にあるものとして捉えていたという点である。

彼らマニ教徒は、真理からそう離れた所に在るわけではない。彼らもまた真理を追い求めるといふ点では一致している<sup>52</sup>。それどころか、カトリック教会もマニ教も真理を探究するといふ点では一致しているのであり、もしマニが提示するものが真理そのものだとしたならば、カトリック教会の教えにも勝るものでありえただろうとアウグスティヌスは言う<sup>53</sup>。しかし彼らマニ教徒は、かつてアウグスティヌスがそうであったように、臆見や誤謬から集められた空しい心象 *imaginatio* に囚われているのであり<sup>54</sup>、教会から離れた所で、マニの提示した真理を明らかにするという約束に軽率に同意したか、あるいは「党派的な熱心さ<sup>55</sup>」 *studio patrium* によって自派の説に拘泥している。それ故、アウグスティヌスが『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』の冒頭で述べているように、マニ教徒が説いた教説の論理的な矛盾を明らかにすることによって、彼らに「矯正」 *correctio* を与えることが求められるのである<sup>56</sup>。

しかし我々がここで問題としたいのは、同書の執筆意図ではなく、こうした矯正を可能にする彼の哲学的な論拠である。

前節で我々は、誤謬が生じる原因をアウグスティヌスが非物体的な真理の認識を欠いた、ただ物体の知覚にのみ基づいた推論に置いていることを確認した。知恵と真理の本性は、清澄な精神のまなざし *acies mentis* によって見る事が出来る<sup>57</sup>。それ故、誤謬から真理への復帰という課題において重要なのは、まなざし *acies* を空間的な事物から非物体的なものへと向け変えることである<sup>58</sup>。このような認識は確かに一部の霊的な人間にのみ許されていることかもしれないが、「人間であるということ故に」可能なものであり、可能性としては万人に開かれている<sup>59</sup>。それ故、人間には誤謬から真理へと復帰する道が常に残されているのである。

この真理の認識についての議論は、同書において部分的なものであるのか全体的なものであるのかは、未だ論じられていない。また如何にして肉的な人間が真理を認識しようになるかについても明らかでない。しかしその後の思想的展開の方向を決定付けている。これらの議論は後に、同時期に書かれた二つの著作、即ち『三位一体論』(400-421)と『創世記逐語注解』(401-415)の中で、神の御言葉の内の理拠 *rationes in verbo Dei* の概念の下に発展し、認識論の全体が整理されると共に、真理の部分的な一瞬の瞥見のみが認められることになる<sup>60</sup>。

## 7 まとめにかえて

以上の考察から得られたものを、ここで簡単にまとめておくことにしたい。



本稿の目的は、アウグスティヌスが接触した限りでのマニ教がいかなるものであり、また彼がそれに対しどのように対処しようと考えていたかを明らかにすることにあつた。

まずマニ教の位置づけについて振り返っておくことにしよう。歴史上のマニ教の位置づけに関してはひとまず置くとして、アウグスティヌスはマニ教をキリスト教の枠内から捉えようとしているように思われる。これは彼に約1世紀先立つ、アクタ・アルケライ系の資料からの大きな転換を為している。ギリシア語系の資料の中でしばしば行われているとされるマニを狂人と看做す態度もアウグスティヌスの内には見られない。むしろ、マニの教説の内にある一定の真理を認めさえしている。

これは恐らく、彼のマニ教徒に対する見方の反映であると思われる。アウグスティヌスはマニ教やキリスト教という区別に先立って、真理の探究という視点を基盤に置いているように見える。真理の探究者という点では、マニ教徒もキリスト教徒も等しい地平に立っているのである。こうした見方は確かに、宣教という目的に役立ったと思われるが、しかしこの観点は宣教という一つの実利的な目的からではなく、アウグスティヌスの認識論の必然的な帰結であったと言える。

彼の認識論に従うのであれば、我々の内の誰であれ、可能性としては非物体的な可知的事物を認識することが出来る。これらの可知的な諸真理は、様々な思考像に対し時に対立し、時に承認を与える。我々は「不滅なる真理そのものである唯一人の内なる教師」によって教えられるのであり<sup>61</sup>、この真理とはイエス・キリストに他ならない<sup>62</sup>。誤謬から離れ唯一の真理の下に立ち戻る可能性が与えられているというアウグスティヌスの姿勢は、包括主義的な態度に貫かれている。従ってまた彼のマニ教に対する対処は、マニやマニ教徒を徒に排斥しようとするのではなく、可能な範囲で正統信仰を弁護し、マニ教徒をこの正統信仰の内へと復帰させようとするものであった<sup>63</sup>。

次にマニ教の核心と問題点とを彼が何処に見たかという点については以下のように言うことが出来る。彼はマニ教の核心を、マニによる天地創造以前の物語の内に見ている。その上でそれらが物質主義的な思考枠から導かれたものであるとして、この物質主義的な思考方法にマニ教の根本的な問題を見ているのである。マニ教の非常に禁欲的な態度や、彼らの出家者達の生活については、本書では全く触れられていない。無論、著作の意図と目的とを考慮に入れる必要はあるが、この言及の欠如は注意すべきものであるように思われる。

最後に残された課題について一言言及して本稿を閉じることにしたい。アウグスティヌスは物質主義的な思考の究極的な原因を、肉的な精神に求めている。この物質主義的な思考を克服し、精神のまなざしを非物体的なものへと向けるよう彼は促すのであり、肉的な生から霊的な生への転換の契機を精神のまなざしは担っているのである。しかし、この精神のまなざしの働きの重要性に対し、いかにしてその向け変えが可能であるのかは、少なくとも本稿の限られた考察の中では明らかにすることが出来なかった。この点については、アウグスティヌスの他の著作の検討が必要であろう。今後の見通しとしては、『告白』における不変の光の観照が第一の手掛かりになると思われるが、しかしより具体的なアウグスティヌス自身の記述を探したいと思う。またアウグスティヌスの認識論における真理の認識の問題についても別途改めて論じることにしたい。

【註】

<sup>1</sup> c. ep. *Fundamenti*, x, 11 では自身がマニ教の教えに捉われていた期間を 382 年までの 9 年間であると証言しているが、『告白』では以後もマニ教徒との交際が続いていたことが記されている為、ここでは 13 年間とした。

<sup>2</sup> この『ホルテンシウス』体験については片柳栄一『初期アウグスティヌス哲学の形成』創文社, 1995, pp. 65-131.

<sup>3</sup> 岡野昌雄『アウグスティヌス『告白』の哲学』創文社, 1997, p. 5. さらに同書第一章註 9.

<sup>4</sup> É. Gilson, *Introduction à l'étude de Saint Augustine*, 4<sup>ème</sup> éd., Paris, J. Vrin, 1969, pp. 246-247.

<sup>5</sup> このマニ教の研究史を含め、本節の記述は須永梅尾『マニ教の世界』清水印刷所, 1991 の優れた考察に非常に多くを負っている。

<sup>6</sup> 須永の分類に従うと、マニ教徒の手になる資料が中世ペルシア語、パルティア語、ソグド語、漢語、トルコ語、コプト語によって、非マニ教徒の手になる資料(主としてマニ教を批判・論駁するもの)がアラビア語、シリア語、ギリシア語、ラテン語によって残されている(須永, 上掲書, pp. 34-46.)

<sup>7</sup> ウィグルではマニ僧が国政に参与し、通商にも関与していた(矢吹慶輝『マニ教と東洋の諸宗教』佼成出版社, 1988, p. 52.)。

<sup>8</sup> アウグスティヌスが活躍した北アフリカでは、3 世紀初めから 8 世紀前半にイスラム勢に注目される迄の約 400 年間、アウグスティヌスの攻撃によってその教勢を弱めながらも存続した(須永, 上掲書, pp. 119-120.)。

<sup>9</sup> これは後にイスラームに引き継がれる。

<sup>10</sup> M.タルデュー『マニ教』大貫隆、中野千恵美訳、白水社, 2002, pp. 32-38. 後述のパラクレートスとは本来この預言者の印璽を意味した(Ibid., p. 35.)。

<sup>11</sup> 矢吹, 上掲書, pp. 46-47.

<sup>12</sup> 筆者が参照した『摩尼教残経』の一節は矢吹が引用したものである(矢吹, 上掲書, pp. 61-62.)。またマニ教の神話と教義については M.タルデュー, 上掲書, p.139 以下。

<sup>13</sup> 須永, 上掲書, pp. 67-68.

<sup>14</sup> 須永, 上掲書, pp. 46-47. 無論(c)の内でも出離者と聴聞者、出離者の中の高位聖職者とそうでない者達の間の差異は考慮されねばならない。

<sup>15</sup> M.タルデュー『マニ教』大貫隆、中野千恵美訳、白水社, 2002, pp.97-99.

<sup>16</sup> 『キターブ・アル・フィリスト』。987-988 年にアル＝ナディームがアラビア語で著した本書は現在でもマニ教の起源とマニの生涯を知る際の基本的な資料である。同書の邦訳は抄訳として、矢吹, 上掲書, pp. 139-163 に収められており、本稿ではこの矢吹訳を参照した。

<sup>17</sup> 須永に従うのならば、マニ自身の思想的背景に関して、現在次の七つの立場が考えられている。(a) マルキオン、バルダイサンらの系統を継ぐキリスト教的グノーシス主義が根底にあるとする立場、(b) ゴロアスター教を基礎とする立場、(c)イラン的グノーシスを起訴とする立場、(d)マンダ教からズルヴァン教と重層的な信仰が基礎とする立場、(e)普遍的な傾向を持った実存的人間論的グノーシス主義を根底に持つとする立場、(f)ユダヤ系のグノーシス洗礼教団であるマンダ教を基礎とする立場、(g)エルカサイ派の改革者として出発したとする説。この内、(g)はケルンのマニ写本の発見によって、近年特に注目を集めている。(須永, 上掲書, pp. 60-61.)

<sup>18</sup> *Contra Fortunatum*, xvi. また須永は、近年の『ケルンのマニ写本』研究の成果として、(イ)幼少期にマニが父と共に過ごした宗教教団がエルカサイ派の一団であったこと(須永梅尾, 上掲書, p. 74.)および(ロ)「マニが新宗教創設の契機に、聖パウロの福音信仰を大幅に受け容れたこと」が明らかになったことを指摘、マニ教内のパウロ文書尊重の傾向がマニに始まるものであったことに注意を促し(須永, 上掲書, pp. 122-125.)、その上で、マニ教の西方化とは、次第にキリスト教化された結果としてユダヤ・キリスト教的異端となったものではなく、既にマニ自身の意識の上にあったエルカサイ派の改革への意識の先鋭化として捉えている(須永, 上掲書, pp. 143-144.)。マニ教がパウロ文書をどのように捉え、自らの教義体系の内に位置づけたかについては詳細な検討が必要であろう。

<sup>19</sup> 須永梅尾, 上掲書, pp. 65-67. なお、アクタ・アルケライで語られるアルケラオスとマニとの論争は後世の創作である(ibid.)。

- <sup>20</sup> *c. ep. Fundamenti*, v, 6: Manichaeus apostolus Iesu Christi providentia Dei Patris. Haec sunt salubria verba, de perenni ac vivo fonte.
- <sup>21</sup> *Ibid.*: Evangelium mihi fortasse lecturus es, et inde Manichaei personam tentabis asserere.
- <sup>22</sup> *Ibid.*
- <sup>23</sup> *c. ep. Fundamenti*, vi, 7.
- <sup>24</sup> *c. ep. Fundamenti*, v, 6.
- <sup>25</sup> *c. ep. Fundamenti*, vi, 7.
- <sup>26</sup> *c. ep. Fundamenti*, viii, 9.
- <sup>27</sup> *Ibid.*
- <sup>28</sup> *c. ep. Fundamenti*, xii, 14. この "...utrum verbo sint iidem [=Adam et Eva] prolati, an primogeniti ex corpore." という問いはマニ自身のものではなく、パティキウスという人物によるものである。彼が何者かは不明であるが、マウリ版は、恐らく書簡の受け取り手であろうと推測している。
- <sup>29</sup> *c. ep. Fundamenti*, xii, 15.
- <sup>30</sup> *c. ep. Fundamenti*, xiii, 16.
- <sup>31</sup> *c. ep. Fundamenti*, xv, 19. M. Jourjon は5つの領域を、無限の闇を根底に置き、その上に一つずつが重なり頂上に霧と煙が存在する縦方向の関係で捉えている(*BA17, Six traités anti-Manichéens*, text. l'édition bénédictine, trad. intr. et notes R. Jolivet et M. Joujon, Paris, desclée de Brouwer, 1961, p. 786 note compl. 54.)。しかしアウグスティヌスの描写に従うのであれば、闇の地の5つの領域は五層の同心円を為していると理解することが可能であり、文脈上そのように解するべきであると思われる。但しマニ教徒がこうした描写をどのように解したのか、さらにまた、図像化するには格好の素材であるが故に、図像化されて布教に用いられたのかについては、筆者は寡聞にして知らない。
- <sup>32</sup> マニ教徒の主張する天地創造以前の時間に対し、「その時」は存在しないというアウグスティヌスの反論は *Conf.*, XI, xiii, 15.
- <sup>33</sup> 確かに悪の問題についての議論(*c. ep. Fundamenti*, xxxv-xl.)もまた彼らの物語を突き崩す為の有効な論拠の一つとして用いられているが分量の点では世界創造以前の物語に対する反駁に譲る。悪の問題についての議論は後に発展した形で『告白』VII巻において展開されることになる。
- <sup>34</sup> *c. ep. Fundamenti*, xx, 22.
- <sup>35</sup> *Ibid.*
- <sup>36</sup> *c. ep. Fundamenti*, xxi, 22.
- <sup>37</sup> Cf. *c. ep. Fundamenti*, xxvii, 30. xxxiii, 36.
- <sup>38</sup> *c. ep. Fundamenti*, xxiii, 25.
- <sup>39</sup> 欠吹、上掲書, pp. 64.
- <sup>40</sup> *c. ep. Fundamenti*, xvi, 20.
- <sup>41</sup> *c. ep. Fundamenti*, xviii, 20.
- <sup>42</sup> アウグスティヌスの初期照明説における判断と真理の役割については、加藤信朗「CONSULERE VERITATEM(Augustinus, *De Magistro*, XI, 38-XII, 40):アウグスティヌスの初期照明説をめぐる若干の考察」、『中世思想研究』18, 1976がある。
- <sup>43</sup> *c. ep. Fundamenti*, xv, 20.
- <sup>44</sup> *phantasma* は身体が直接に知覚する視像である *phantasia* と区別されるものであり、両者の区別は既に『音楽論』(387-389)において確立されている(*De Musica*, VI, xi, 32.)。
- <sup>45</sup> *c. ep. Fundamenti*, xviii, 20.
- <sup>46</sup> *c. ep. Fundamenti*, xxxii, 35.
- <sup>47</sup> *Ibid.*
- <sup>48</sup> *c. ep. Fundamenti*, xxv, 28.
- <sup>49</sup> *c. ep. Fundamenti*, xx, 22.
- <sup>50</sup> É. Gilson, op. cit., p. 246.
- <sup>51</sup> 無論ここで筆者は、布教に際して分かり易く単純な物質主義的な教えが説かれていた可能性を排するつもりはない。当時のマニ教の聴聞者や下位聖職者階級の中で、そのような解釈が大勢を占めていた可能性は大いにあり得るからである。実際P.ブラウンはマニの啓示を字義通りに受け取る、洗練されていない単純な人々から成る「原理主義的」グループと接触したことがアウグスティヌスのマニ教に対する幻滅を生じさせたとしている (P. Brown, *Augustine of Hippo: A Biography*, Berkely and Los Angeles, Univ. of California Press, 2000[1967], p. 45. 邦訳『アウグスティヌス伝』(上)出村和彦訳、教文館, 2004, pp. 60-61.)。

---

従って我々は、マニ自身の教えと、教会の高位聖職者の教えとの間の相違を、そしてまた一般に広く受容されていたマニ教徒達の自己理解とを峻別する必要があるだろう。

<sup>52</sup> *c. ep. Fundamenti*, iii, 4. Cf. *Conf.*, III, vi, 10.

<sup>53</sup> *c. ep. Fundamenti*, iv, 5.

<sup>54</sup> *c. ep. Fundamenti*, iii, 3.

<sup>55</sup> *c. ep. Fundamenti*, xxxiii, 36.

<sup>56</sup> *c. ep. Fundamenti*, i, 1.

<sup>57</sup> *c. ep. Fundamenti*, xv, 20.

<sup>58</sup> *c. ep. Fundamenti*, xlii, 48.

<sup>59</sup> *c. ep. Fundamenti*, iv, 5.

<sup>60</sup> 但しこの点についての詳細な考察は、紙幅の都合上、別稿に譲る。

<sup>61</sup> *c. ep. Fundamenti*, xxxvi, 41.

<sup>62</sup> *De magistro*, xi, 38.

<sup>63</sup> その点でマニ教の過度なキリスト教化は、マニ教自身のその後の命運を決定付けたと言えよう。

(やまだ・しょうたろう 筑波大学人文社会科学研究所 哲学・思想専攻)